R1 現代GP地元型に応募するには

地方・地域をとりまく政治的経済的な状況をみきわめて適切な判断をする必要がある。

地域の崩壊を目前に、総務省も本気を出している。文部科学省もそれに引っ張られているようだ。

- 総務省と文部科学省が組んでとりくむという現代GPは、希有のことだったのでは。
- 地域再生計画への応募については、NGO・NPO特論担当のコンサルＫ氏に教えてもらおう。
- 地域の崩壊という現実（中国四国で廃村が1000出ると予想）に総務省も危機感がある。

山口市との提携をまずはめざして、山口市にもその気になってもらうには。

- 自治体は金がないので、大学との提携で金が出るなら、飛びついてくる可能性がある。
- 広域と地元型があるが、まずは地元型でまとめてみればどうか。
- 徳地との提携を山口市との提携に発展させるためのメニュー作りでもある。

山口市の次には、県内全域という広域をめざすかという判断が必要。

- 高大地域連携事業でグリーンツーリズムの試行を昨年度は３か所でやった。
- 山口県からツーリズムの講座を引き受けてみないか、という打診が県大にあった（1月9日）。

急ぎ具体的戦術をたてて申請に臨むべし。

- もしもあたったら半年で1000万円をつかうことに。0有能な事務職員の臨時雇用0を含めた申請にすべき。
- ともかく小回りのきく移動の手段がなくては学生と地域に出かけられないという限界を突破すべく作戦を。
- 大学の紹介には、ページ制限がないので、大学院のシェマのようなものを２，３枚書く必要がある。

教職員の一体感、学生･院生の一体感が育つ仕掛を

大学人が一体感をもって地域貢献に乗り出す姿をイメージすること。それを全学に伝えること。

大学内の全体を巻き込むしかけをしなければ。

- 環境についての取り組みでの申請とよいライバルとしてやれるように努力すべき。
- 地域共生演習とNGO・NPO特論担当者を知恵袋にしてプランづくりを検討したい。
- 教員が地域にでかけざるを得ないしかけにするにはどうすればいいか。

大学での一体感の醸成へ向けた看板作りが必要。

- これまでの活動や学生の感想、地域の思いから資料はいくらでも作れるだろう。
- 地域貢献型授業の相互関係を示すシェマを作ることは必要。
- これまでバラバラにやっていたものを、ひとつのポリシーで統一的に支援する。

たとえ仕事はふえても、予算がつくならこれはありがたいことだろう。

- 地域貢献大学になると宣言したからには、その意気を示したい。
- 理事長＝学長からのたっての依頼（地域貢献で応募してくださいよ）で豚も木にのぼってみようかと思った
- 申請にかかわった特定の教員がやるのではない。予算がつけばみんなでやることになる（理事長の言葉）

これまであまりめだたなかった大学院生のリードで、1年生から地域で活躍できるしかけを。

これから大学院の国際文化学研究科が学問的に地域貢献でも熱くなる予感

- 県立大の大学院＝地域リーダーの巣窟になりそうな予感がした今年の面接。
- 山口国際文化学研究会の発足。

- 一般教育から大学院までというのは、それなりにインパクトはあると思う。

1) 2007年3月8-10日
2) 済州島にて
3) Ankei Brain Storming
4) ANKEI Yuji

R5　現代GP具体策　第二のふるさと発見プロジェクト

あってよかった県立大学、といわれるいいざという時に頼りになる大学に

ご近所の底力の発揮を大学が手伝うことで、存在感を発揮。

大学のご近所の環境関連の困りごと解決のお手伝いなどを学生主導の団体が担う。

- 地元の宮野地区の地域づくり計画に学生支援グループを窓口として参加する。
- 環境NGOが、地域と組んで大学の古自転車再生を行う取り組みを進める。

地域共生センターの地域の困りごと相談窓口としての機能を充実させる。

大学以外の組織との連携に、実質的な活動内容を与えていく

地域･高校･大学の連携を山口市でまずは創っていく。

- 合併前からの徳地町との提携を山口市全域のものにし、2008年１月をめどに締結。
- 野田学園との包括的連携を生かして、高大連携で、アートふる山口や河村邸を支援。

山口市以外の地域との連携は、2008年度以降大学の独自予算で準備を進めるものとする。

NGO・NPO特論は市民活動支援センター・県民活動支援センターとの連携の上で進める。

1) 2007年3月12日
2) 山口市
3) Ankei Brain Storming
4) ANKEI Yuji

大学のおかげで元気になったという声が学生からも地元からもあがるようなとりくみを。

学内の教育指導体制を横の連携、世代間の継承を保証できるシステムに移行する。

学生による順次指導体制の確立。

- １，２年生による自転車再生のゼミに、経験ある先輩学生が指導することを単位化する。
- 大学院授業「NGO・NPO特論」を地域で開催し、地域リーダーの集う場を育てる。
- 地域共生関連授業に係わるTA制度の創設。
- これまでボランティアとして関わってきた学生たちを、TAとして委嘱する

ボランティア・インターンシップ・山口の歴史と文化・地域問題などの科目との連携。

必要な人的、物的な予算を計上する。

- 県からの派遣で大学院生として、地域貢献活動の現場の高校教員が入る予定。
- プチボランティアセンターと地域共生エンターを結ぶ「地域共生活動支援スタッフ」を。
- 地域共生センター内に地域づくり評価部門を新設し３年間の時限つきでスタッフをおく。
- 普通免許で運転できる１０人乗り程度の車両を２台購入。（車庫は旧中型バス車庫）

3年間の車両維持費（２台分）を計上したい。

新山口市の特色をいかして、都市部と山村部の両方でのとりくみを展開する。

山口市内の市街地での取り組み予定の例

- 「アートふる山口」への学生の参加による商店街の活性化。
- 山口市の町おこし担当者が大学院生として「アートふる山口」を題材に研究する予定。
- 地域貢献担当理事が非常勤講師陣に加わり、地域からも地域共生演習をバックアップ。
- 市内の中心街の空き家をデイサービス・地域交流拠点にする河村邸を実習の受け皿に。

地域実習(国際文化学部専門授業）において山口市での国際観光ボランティア（2008以降

山口市の田園部での地域共生の具体例

- 学生主導で、地域の健康・栄養学セミナーをサテライトキャンパス利用で実施。
- 徳地地区での草刈りボランティア・祭り準備など第二のふるさとづくり活動

山口市徳地からのメッセージ「第二のふるさとを見つけませんか」をプロジェクト名に。

地域共生演習（一般教育科目）の山口市での展開。

R3-4 現代GP　本質追究･構想計画　やまぐちの地で県立大学にできることは

やまぐちの地域性をきちんと踏まえてグローバル化の中での地域振興のモデルを示す。

広域合併した山口市をひとつのモデルとして地域活性化と大学の活用という問題に挑戦。

山積する地域課題をローカルな視点に徹して解き、全国の手本のひとつにしたい。

- 限界集落が中国四国で１０００に達して、日本でも過疎・少子化が著しい。
- 心のよりどころとしての祭りが失われれば地域はほろびる。
- 地域の心のよりどころとしての小中学校の廃校とその跡地利用の課題。

市町村合併にともなう困難な課題を解く方法を大学としても模索する。

- 合併後広がった新山口市も、広い過疎地域、中山間地域を有するにいたった。
- 旧1市４町の旧地域の伝統を守り、住民間の一体感を育てるための大学としての貢献は。
- 新市全体での役場職員の広域配置転換は役場職員の一体感をもたせる機能優先か。

具体的に地元山口市との連携を進めていくことが必要という認識では一致できそうだ。

- 山口市と提携する予定で協議を進めている。
- 同じ山口市にキャンパスをもつ３大学共同で、山口市長との協議を始めたところである。
- 宮野駅を市民活動のためのセンターとして改装し活用してきた実績を生かす。
- 来年度からの改組に合わせて、地域貢献型の授業がいよいよスタートする。
- 山口市での経験を積み重ねて、他地域にも広げつつ、全県的な施策への提案につなげる。

山口市でのとりくみは、山口県全域にひろげる可能性をにらみつつ進める。

これからのばしていきたい山口市でのとりくみの具体例。

- 商店街の活性化のための「アートふる山口」と実習の連携。
- 古い町屋を再生して町中デイサービスとして活用する中で、学生が活躍する。
- 自転車再生を通した近所の困りごとの解決へ向けた取り組みも。
- 町と田舎をつなぐ、グリーン、ブルーツーリズム開拓への協力。
- 地域の国際化という課題に答える実習型の授業を行なう。

学生･教職員･地域のさまざまな取り組みがちぐはぐにならずよい連携に育つしかけを。

地域の人々･学生･教職員が、フットワーク軽く交流･提携できるように。

小さい大学なのだから、教職員が互いに顔の見える一体感をまずは持ちたい。

- 大学内・学部内・学科内での一体感と、それぞれの連帯・連携をつくるための努力。
- Small is beautifulを実感できる大学をめざして。

学生が気軽に地域に出かけられる仕掛けを。

- 学生が地域との一体感や地域課題を感じられる授業を。
- 大学とアパートとアルバイト先しか知らない寂しい4年間にならないための工夫が必要。
- 公共交通手段が乏しい中、学生の移動の手段の確保。

地域と大学の壁が低くなり、相互により深い関係を築けるしかけづくり。

- 地域住民が学生や大学の存在感を感じられる取り組みを。
- 出前授業・公開講義を越えて地域住民と切磋琢磨する。
- 地域に出て行くタイプのFDを実施することも検討課題。

大学内外の地域活動型の支援組織を有機的に結合していく。

- サテライト研究室における大学院生の起業支援と街作りとの融和
- サテライトキャンパスの活用と地域活性化のリンクをはかる。
- プチボランティアセンター、地域共生センターとの連携で進める。
- 山口市民活動支援センター「さぽらんて」とのパイプを生かす。
- 山口県民活動支援センターとも今後、実際の連携活動を深めていく。

学生支援グループも地域貢献型に

1) 2007年3月11-12日
2) 済州島から山口へ
3) Ankei Brain Storming
4) ANKEI Yuji

R2 現代GP現状把握　県立大学のこれまでの地域貢献の取り組み例

地域に足をつけた大学としての多彩な取り組みを展開しているが本当の成果はこれからの努力次第だろう。

大学の教育力を地域に、地域の教育力を大学にという双方向の取り組みも実り始めた。

地域が学校、地元が先生という様々な取り組みの成果。

- 環境問題・地域問題講義で、地域リーダーを迎えて行うオムニバス講義（1995～）。
- 地域への授業公開、出前授業。年間○回程度開催(2006年度現在)。
- 公開講座受講生の同窓会からＮＧＯネットワークエコーが生まれ、現在も続いている。
- 大学の研究支援活動の一環として講義録『やまぐちは日本一』を書店から刊行（2005)。

提携関係を生かして、地域の活性化のための支援を多面的に展開してきた先進的な事例。

山口市徳地地域との包括的提携により教育･研究･地域貢献を積極的に展開（2004～）。

- 廃校を利用したサテライトキャンパスでの地域の子ども達のためのイベント（2005）。
- サテライトキャンパスを利用した、徳地の地域リーダーキャリアアップ事業（2006～）。
- 徳地町（現在の山口市徳地）と大学との包括的提携(2004年10月)。
- 住民による地域振興グループ、徳地づくり達人塾への教員・学生の参画（2004～）。
- 徳地地域からの委託研究（年間200万程度、2005～）。
- 中国韓国の提携大学との学生交流事業を徳地地域で受け入れ（2006～）。
- 地域振興ウェブページ作成への支援（2006）http://tokudi.jp,http://niho.jpなど。

教職員･学生がそれぞれの立場で地域へ出向くための体制は一応とられている。

大学外の組織の支援を受け、学生が実際にキャンパス外へ出やすいように努力している。

- 県民活動支援センターから、国際文化学部地域実習授業の受け入れと旅費支援（2004～）
- 経営者協会との連携で企業でのインターンシップを実施している（2000?～）。

大学教職員の地域貢献の窓口として地域共生センターは機能してきている。

- さくらの森相談室を設置して、多様な相談に応じられるしかけを準備（2004～）。
- 地域共生センタを中心に産学協同・公開講座・生涯現役などの課題に取り組む（2003～）

学生ボランティアを送り出す仕組みを生かして迅速に対応できた例。

- プチボランティアセンターに職員を配置して、学生のボランティア授業を支援（2004～）
- 台風被害を受けた山口県内への災害復旧ボランティアへの教職員・学生の参加（2005）。
- 山口県国際交流協会に協力して、地域で暮らす外国人への理解を求める取組（1995～）。

全国から集まった学生が山口で就職して地域リーダーになり、地元の地域リーダーが大学院生になるという良い循環へ向けた動きが徐々に加速中。

地域で存在感のある県立大学生たちによる活動が近年少しずつ盛んになってきた。

地域で県立大学生が存在感のある動きを見せている。

- 地元の寺へ出かけて、本堂で地域問題の授業を受ける（2003）。
- 駅舎を改装した宮野駅交流ステーションでサークル活動と地元との交流（2000～）。
- 大学向いのしいたけ農協主催のイベントへの学生のボランティア派遣。
- キャンパス内の自転車再生による地域のゴミの減量を目指す授業（2006～）

観光施設を福祉や地域活性化のセンターとして見直す動きへの学生の参画。

- 湯田温泉の活性化を目指す足湯の調査による入浴福祉の研究ゼミ（2006～）。
- 800年の歴史をもつ石風呂体験を含むバスツアーを地域が企画して学生が参加（2006）。
- 山口市徳地地区の温泉復興計画を徳地づくり達人塾で学生教職員が支援（2004～）

地域の子ども会や高校との連携の取り組み。

- 地元の子ども達が大学でキャンプをして、巨大そうめん流しを楽しむ（2000～2002）
- 旧付属幼稚園の一部を利用して、子ども達への読み聞かせの会を継続（1998～）。
- 高大連携で、徳地づくり達人塾のワークショップとフィールドワークを実施（2004～）。
- 市内の野田学園高校との包括的提携が成立した（2007年2月）

大学のある宮野桜畠地域との世代を超えた多彩な人的な交流の蓄積。

- 宮野で広葉樹を増やす「マロニエの森の会」での学生の派遣。
- 創立記念日のグリーンデーにおける地域と共同での環境美化事業（2003～）
- 宮野地区振興基本計画づくりへの学生・教職員の参画（2006年）
- 地元宮野地区のふれあい・いきいきサロンへの社会福祉学部学生の参画と支援（2005～）

卒業後も地域の輝きを増すための人材として地域にとどまる例も増えてきている。

出身を問わず、卒業生が山口に残り、県立大学の応援団として機能している。

- 山口の地域の魅力によって、県外学生が就職して、山口市内に住む例も多い。
- 女子専門学校・短大・女子大以来の卒業生の厚い人脈が共学化しても大学の応援団。
- 卒業生が記者として働くする山口市の地域新聞を学内で学生向けに無料配布（2004～）。

地域に根付いた大学院、大学院生＝地域のリーダーというよい先例が蓄積されつつある。

- 町屋を改装したデザイン研究室を株式会社化して、大学院生が社長になり経営。
- 卒業生が山口市内の町屋を改装した店で手作り家具店を経営。
- 萩焼作家、服飾工場長などのユニークな履歴をもつ社会人大学院生の活躍。

1) 2007年3月12日
2) 山口市自宅～大学
3) Ankei Brain Storming
4) ANKEI Yuji